
月の影に潜む

来内 直三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の影に潜む

【Nコード】

N2919B

【作者名】

来内 直三

【あらすじ】

昔は存在していた…。今は存在を否定されたもの…。空想と言う人が作った空想のなかに閉じ込められた生きもの。人と妖怪に挟まれた主人公…。友情に恋愛などきれいにまとめて行こうと思っています。

第一話 静かな始まりそして高鳴り（前書き）

フィクションです。名前・団体名等は一切関係ありません。こんな感じ？なんせ初めてなんで。指摘をいただけるとうれしいです。読んでくれると幸いです。

第一話 静かな始まりそして高鳴り

やたらと紅い満月の日…

千葉の高津で産まれてこようとするもの。まだ彼も自分がなんなのかは知らない。生物学的には、人間・男性。

1975年11月7日午前5時55分初め声をあげる。

見えるはずの無いその目ではじめて見たものは、顔の無い少女だった。

京一『つたくよ！内の親マジうるせえ』

努『ははっ、仕方なくね？お前一人っ子だし、期待してんだろ』

あの日に産まれたもの。（海住 京一）今は18才。とりにいるのが小さい頃からの友人で同じ高校に通う唯一の理解者である。（

松本 努）

努『小さいときのお前が、凄すぎたんだよ。今は、完全にその片鱗も見えないけどな』

京一『うるせえよ』

いつもの公園ベンチに座る二人。タバコを吹かしながら談笑をしていた。

努『最近ほ、どうよ。その…なんだ… 悪かったよ。睨むなよ』

努が何を聞きたいのかは京一にわかつている。

京一は、物心がついたとき、いや産まれたときから人には見えないものが見えていた。形容しがたい人には見えないものが。

京一は、3才の時には、小学生並みの読み書きができ小学生になる頃には天才少年と周りがはやしたてていた。親も見えないものが見えてる不自然さに戸惑いながら…。8才の時に親にきいてみた。

京一『ママ、あの飛んでるものは何？どの図鑑にものってないんだあ』

母『鳥？どれ』

愛しそうに聞き返す母の顔は覚えていない。

京一『目に角やら包丁みたいなのがついてて…ほら今あの人の中に入ったよ』

見たことのない母の顔があった。指を指していた手はすごい勢いで叩かれ。

母『そんな生きもの！いるわけ無いでしょ！気持ちわるい』そのときの母の顔は覚えている

その夜、父にその事を話してみた。

父『んゝ、京がうそをついてると思ったんじゃないかなゝ、ママきつと。ただパパも見たことないなあ』

京一『えー今も目の前にいるじゃん。昼のとはちがうけど目に口がついてるのが』

と父の右肩のあたりを指さす。

父『ははは、京一は想像力が凄いなあ』

京一『え？やつぱり見えないのパパも？』

父『はいはい。もうわかったから。ご飯できたみたいだぞ』

父の肩に乗ったそのものが静かにすーっと飛んでいく。

京一『ほら！飛んでったよ』

見向きもしないで笑ってる父親の手を引く。父『いいかげんにしなさい！』

その時の父の顔もはつきり覚えている。

誰に話をしても大体同じような事の繰り返しである。

小さいながらに考えた答えが（自分にしか見えてない。自分が見えてるのに。）いつしかもつと擦れた考えになる。（見えない奴と心が気持ちいが考えが理解できるわけが無い）自然と親や周りの友人と距離がでてくる。何もおもしろくない。そんな中、努は必要に京一と仲良くしたかった。なぜかは、本人もわからないらし

努『いやさ、最近よく足が痺れるからよ。またいるんじゃないかと思つてよ』

京一『いたら取ってやってるだろ！そんな白状もんじゃねえ』

昔に、努が腹痛で倒れ、救急車で運ばれ医者に急性盲腸と診断されて家の親と一緒に、病院で努の親を待っているときに、努の体に入り込んでる

「そのもの」

をとってやった時に努にはわかったらしい俺が何かしたのが。しつこく聞くので仕方なく話すと意外なほど信じてくれた。正直うれしかった。

京一『ただ最近よく。人なんだけどなんか雰囲気か人？みたいなのをみかけんだよな。まあふつうにしゃべってから周りには見えてっけど』

努『服が透けて見えたらうらやましいけどなあ』

ミニスラのスタイルのいい女性の後ろ姿を見てニヤニヤしながら言う。

京一『これだ…お前最近タエと別れてからそればかりだな』努『仕方ないだろ。思春期なんだから。にしても転校してきた高橋 愛すげーよくね』

京一『高橋ねえ。この時期に転校っておかしくね？タエに言っておくよ』

試しに言ってみる。

努『なっなんでだよ！』

京一『別れたんだろ？別にいいじゃん？』

努『いや、あいつが嫌がるからよく。勢いでな、つい』

京一『ナニヲ、イヤガルンダイ』

にやにやしながら茶化したように意地悪く言う。

努『……』

京一『悪かったよ。ただ泣いてる女の相談役は勘弁してくれ。つらい』

努『今日、電話する』

京一『ん、そうしてあげなこのままじゃお前と兄弟になりそうだ』

努『はあ？な、なな何それ？おまうなつ、チツ、お前なんかしたのか？』

京一『シソウニナツタ。なにもしてねつ、あつ熱！タバコ投げんなよ！バカ！あ、ごめんなさい。何もしてません。本当に』

顔赤くしながら。目がやばい。しばらく抱き締めながら慰めたのは、黙っておくことにした。

耳障りなほどうれしそうに受話器から聞こえる

タエ『やったよ！京！ツトムから電話でやり直したいってえ』

なぜかタエは努のアクセントが変だっなんて事を考えながら適当に相づちをうつ。

タエ『聞いている？だからお礼に女の子紹介するってえ』

京一『聞いているよ。前から言ってたんだろ。紹介されたら真剣に付き合わないやいけなくなるからいいって』

タエ『律儀だよな。結構もてるんだからとつかえひつかえ付きあっちゃえばあ』

（女のお前が言つかと）言いそうになるのを堪え話題をかえるつもりで

京一『それよりさあ、高橋愛ってどんな子？なんか知ってる？』

言った瞬間にしまったと思う。これじゃ俺が気があるみたいだな。

タエ『ふふふん、愛ちゃんねえ』

顔は見えないが目がキラキラしてるのがわかる。

タエ『じゃ決まりね！来週の日曜！愛からも京一を紹介してってたのまれたんだあ』

京一『はあ？何言ってたんだ？』

タエ『じゃ明日ね』

ガチャ！何か言おうにも受話器からは無機質なツーツーっしか聞こえなかった。

頭の中で繰り返す（来週の日曜）京一は心臓が高鳴っていた。それは青春がもたらす青臭い高鳴りでは無く

「高橋 愛」

人の形をした

「そのもの」

に見えていたから…

第二話 騒がしい三日間（前書き）

書いてみたらちよつとダレたかも！評価を参考にして二話目載せてみました。よろしかったら、意見を書いていただけると、うれしいです。

第二話 騒がしい三日間

なんとも言いよつた無気持ぢでむかえる日曜日。

今は朝9時……

『ふうー。なんか顔色わるいなあ』

洗面所の鏡に写る自分に京一が言う。

『まあ、今日であの居心地の悪い学校生活が少しは、ましになるだろ』

半強制的なタエの約束からの三日間は、なんとも言い難いものだった。

『なんだよ。お前も気があつたんじゃん。だから俺にあんな事言つたわけ？』

朝の挨拶も抜きに靴を上履きに履き変えてる京一に努が言う。

『おはようございます。なんの話でしょうか？』

他人事の用に、やれやれと言つた表情を見せながら京一は答える。

予想どうりの努の発想をバカにしながら。

『自分が、高橋をねらつてるからつてライバルを減らそうとしたんじゃないの？』

たれ目を細くしていやらし横目で努が言う。

『バカか、お前などライバルにもならねえ』

見向きもせず答える京一。

『な……お前ね』

結構傷ついたようだ。努と京一が三階までの階段を昇り教室への廊下に出た時には、凄い勢いで廊下を、疾走してくるタエがいた。京一は、顔に手をやりながら覚悟を決めていた。

『今日は、一日うるさそうだ』。

京一の考えは甘かった。努とタエのコンビは、他に話すことなど、あるはずが無い、と言つた勢いでひたすらに、話つづけた。この三日間で勝手な妄想を膨らませながら。

そのせいか、高橋を見ると京一は、顔を赤くし逃げていた。完全に努・タエのいい的になっていた。

『でも、京一にあんな一面があつたなんてなあ』
ふざけた顔で努が言う。

『ねえ、もう逃げてる姿が・ぷっふっあははあ。だっだめっおかしい』

吹き出しながらタエが言う。京一が居ないところでも二人の話題は、この話で、もちきりだ。

少し間を開けて照れ臭そうに努が言った

『でも正直俺うれしんだよな。ずっとあいつと一緒に、いるけど、いままで誰も寄せ付けないような雰囲気出してたからさ。』

ん、と考えるような態度でいいすらそうにタエが

『やっぱリットムが、前に言つてた事が原因？』

『わかんねえけど、誰にも見えないものが見えるって結構ストレスなんじゃね』努も考えながら言う。

『どんな、ものが見えるの？』

透き通るようなどこか冷たい感じの声が二人の耳に届く。

二人のすぐ後ろに高橋 愛がいた。傾く太陽に影が必要以上に背伸びをしてるかのような薄い影を連れて。

努がうわずったように

『いきなり声かけるなよ』調子のいい声でタエもつづく

『愛って家こつちだっけ？』

タエの問いを無視して二人に詰め寄る。薄い影をのばしながら…。

『どんなものが見えるの？』

愛の、ほんのり甘い香を、感じながら努が口早に答える。

『な、なんの話だよ？それより明日大丈夫なのか？』

愛は、やはり答えない。『愛…明日平気だよな？京一も楽しみにしてるよ』

一瞬の間の後『うん！私も楽しみ！でも京一君は、私を避けてるみ

たいだったよ。あ！ごめん！急ぐんだった。二人の邪魔をしてごめんね。また明日ね」

と若干茶化したように、手を合わせて小走りで二人の先に行く。影の濃さも声の存在感も無くなっていた。「やべえ」。聞かれたあ」

その場に座り込み努が言った。

「京一、怒るかな？」

努の前にまわってしゃがみながらタエが言う。「お前に、話した事さえ怒るだろうなあ」

目線を落としながら小さい声で答える。

「まあ、仕方ないじゃん聞かれたんだから。喋ったわけじゃないんだし…」

愛の向かった方を見ながらタエが答える。

「…ああ」

「え？」

タエが努の目線を追う…

乾いた音が辺りに響いた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2919b/>

月の影に潜む

2010年12月21日02時07分発行